猿蓑　乾

文研
911.33
Mu24s
1

晋其角序

誹諧乃集つくる事古今に
わたりて此道のおこりて起無
き時なきかや幻術の事一吹に
してその代句より魂入さ達
てゆきんと趣あつめて似たる
無しくしく世にまより
古く人よろしおて不變の變

早稲田大学図書
911.33
文学研究科 中村俊定 No. 62
早稲田大学大学院文学研究科図書
0. 555
45-5061

をましむ五徳ハいふに及ばず
ゆへをこらし道きはめしな
これなり彼藏り上人の骨有
て人を作りて禅ハまれ
なる笛を吹やうになんいへる
とりさわぎ人に成て法を
然るに五の禅のまゝ統は
又魂の法のあらはるゝ所に

露わをもしたまふる所に入ます
にアイウエヲよくひゞきて
いかなる吟禅をきはめ道
し只俳諧に魂の入ます禅
まことにして我翁行脚の道
伊賀越しある山中のこく
猿に小蓑を着せて俳諧
の神をいれたまひしものなれた

たちまち断腸のおもひを叫
ひけむあたに懼るへき幻
術なりこれを元として此
集をつくりたて猿みのとは名
付申されける是か序もその心を取て
魂を合せて去来
凡兆のほしけなるにまかせて
書

猿蓑集巻之一

冬

初しくれ猿も小蓑をほしけ也　芭蕉

あれ聞けと時雨来る夜の鐘の声　其角

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　千那

幾人かしくれかけぬく勢田の橋　僧 丈艸

鑓持の猶振たつるしくれ哉　膳所 正秀

広沢やひとり時雨るゝ沼太郎　史邦

舟人にぬかれて乗し時雨哉　尚白

伊賀の境に入て

なつかしや奈良の隣の一時雨　曽良

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　凡兆

馬かりて竹田の里や行しぐれ　大津　乙州

だまされし星の光や小夜時雨　羽紅

新田に稗殻煙るしぐれ哉　膳所　昌房

いそがしや沖の時雨の真帆片帆　去来

はつ霜に行や北斗の星の前　伊賀　百歳

一いろも動く物なき霜夜かな　野水

淀にて

はつしもにて寝とむしろう船の中　其角

帰花それにもしかん莚切れ　同

禅寺の松の落葉や神無月　凡兆

石香ものわる狩手の松に十月　嵐蘭

こがらしや頬腫痛む人の顔　芭蕉

なかけ道に飛入の冬木立　凡兆

なりしよて

掉尾のうきあかる枯柳　伊賀 土芳

渋帰をなかめて通る十徳哉　膳所 裾道

ちぬの浦秋やはなれ人ある乙女　越人

このごろは茶の木に見ゆる冬のひかり　伊賀 猿雖

古ちゝ貫子も書し冬の月　凡兆

翁の墨田に宗居をやきと

雑水のなどころならば冬ごもり　其角

この寒さ牡丹の花はまつ裸　伊賀 東来

草津

晦日をもまつうへいのちかな　尚白

神迎水口だちか馳走哉　珎碩

霜月朔日

猪ゝからなよ物かし赤柏　伊賀 良品

水無月代みをまつや水仙花　羽州坂田 不玉

今は世をたのむけしきや冬の蜂　尾張 旦藁

尾頭のこゝろもとなき海鼠哉　去来

一夜〳〵さむき姿や釣干菜　伊賀 探丸

みちはたに多賀の鳥井の寒さ哉　尚白

茶湯とてつめたき日にも稽古哉　江戸 亀翁

炭竈に手負の猪の倒けり　凡兆

住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉

寝ごゝろや火燵蒲団のさめぬ内　其角

門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆

木兎やおもひ切たる昼の面　尾張 荻境

みゝつくは眠る処をさゝれけり　伊賀 半残

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり　丈艸

浦風や巴をくづすむら鵆　曾良

あら磯やはしり馴たる友鵆　去来

狼のあと踏消すや濱千鳥　史邦

背門口乃入江にのぼる千鳥かな　丈艸

いつ道を雪にまふきて鳴千鳥　千那

矢田の野や浦のなくれに鳴千鳥　凡兆

筏士のみかへる跡や鴛の中　木節

水底を見て来た顔の小鴨かな　丈艸

鳥どもも寝入てゐるか余吾の海　路通

死まで操ならん鷹はなしか　旦藁

襟まきに首引入て冬の月　杉風

此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

かしをらの蒲團ころりや冬の猿　長崎 暮年

見んやさしき旅人かへし石部山　大津尼 智月

翁より紙のふるき衾をとらせらるゝ記あり略之

首出してはつ雪見んとしや此衾　美濃 竹戸

題竹戸之衾

畳めハ我が手のあとぞ紙衾　曽良

魚のかけ鵜乃やるせなき氷かな　探丸

志川かた紋数珠も扣もすつ網代守　丈艸

御白砂に候す

膝つきにかしこまり居る霰哉　史邦

椶櫚の葉の霰に狂ふあらし哉　野童

鶴乃鴫らわこほす霰かな　伊賀 不蜂

呼かへす鮒売見えぬあられ哉　凡兆

こかれ澤る青や朝飯の出来遅　膳所 晝好

まつ宵や内に居られぬ人の謹　其角

初雪に鷹部屋のぞく朝朗　史邦

霜やけの手を吹てやる雪まろげ　羽紅

わぎもこが爪紅粉のこす雪まろげ　探丸

下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆

ながながと川一筋や雪の原　同

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し　芭蕉

草庵の留主をとひて

衰老ハ簾もあけず菴の雪　其角

雪の日ハ竹の子笠ぞまさりける　尾張 羽笠

詫よとも鍵かゝハ雪も積るらん　長崎 卯七

ひつかけて行や雪吹のてしまござ　去来

青亜追悼

乳のみ子に世を渡したる師走哉　尚白

から鮭も空也の痩も寒の内　芭蕉

鉢たゝき憐ハ顔に似ぬものか　乙州

一月ハ我に米かせはちたゝき　丈艸

住吉奉納

夜神楽や鼻息白し面の内　其角

節季候よ又のうむへき事もなし　伊賀 須琢

歳くやるちいやしき拂　同 祐甫

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我ハ年忘　芭蕉

弱法師我門ゆるせ餅の札　其角

歳の夜や曾祖父を聞けば小手枕　長和

うす壁の一重は何かとしの宿　去来

くれて行年のまうけや伊勢くまの　同

大としや手のおかれたる人ごゝろ　羽紅

やりくれて又やさむしろ歳の暮　其角

いねいねと人にいはれつ年の暮　路通

年のくれ破れ袴の幾くだり　杉風

猿蓑集巻之二

夏

有明の面おこすやほとゝぎす　其角

夏がすみ曇り行衛や時鳥　木節

野を横に馬ひきむけよほとゝぎす　芭蕉

時鳥けふにかぎりて誰もなし　尚白

ほとゝぎす何もなき野ゝ門構　凡兆

ひる迄はさのみいそがず時鳥　智月

蜀魂なくや木の間の角櫓　史邦

入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

ほとゝぎす滝よりかみのわたりかな　丈艸

心なき代官殿やほとゝぎす　去来

こひ死ば我塚でなけほとゝぎす　遊女 奥州

松嶋一見の時千鳥もかるや鶴の毛衣とよめりければ

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曽良

うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

旅館庭せまく庭草を入ず

若楓茶いろになるも一さかり　膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

花水にうつしかへたる茂り哉　其角

葉がくれぬ花を牡丹の姿哉　江戸 全峰

別僧

ちるときの心やすさよ米嚢花（ケシノハナ）　越人

智恵のある人にはみせじけしの花　珎碩

翁に伴られてすまあかしにわたりて

似合しきけしの一重や須磨の里　杜国

青くさき匂もゆかしけしの花　嵐蘭

井のすゑに浅く清し杜若　半残

起出て物にまきれぬ朝の間乃

起々の心うこかすかきつはた　仙化

題去来之嵯峨落柿舎

豆植る畑も木部屋も名処かな　凡兆

破垣やわざと鹿子のかよひ道　曽良

南都旅店

誰のぞくならの都の閨の桐　千那

洗濯やきぬにもみ込柳の葉　尾張 亡専芝

豊国にて

竹の子の力を誰にたとふべき　凡兆

多けの子や畠隣に悪太郎　去来

たけのこや稚き時の絵のすさみ　芭蕉

猪に吹かへさるゝ声もしられ　正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉

君が代や筑摩祭も鍋一つ　越人

五月三日
わたましせる家にて

到来の畫と並べてふける菖蒲哉　其角

粽結ふかた手にはさむ額髪　芭蕉

隈篠の廣葉うるはし餅粽　江戸 岩翁

さびしさに客人やとふまつり哉　尚白

五月六日大坂うち死の
遠忌を弔ひて

大坂や見ぬよの夏の五十年　伊賀 蟬吟

奥州高館にて

夏草や兵ともがゆめの跡　芭蕉

這出よかひやが下のひきの声　同

此境はひわたる程といへるも
こゝの事にや

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石　同

五月雨に家ふり捨てなめくぢり　凡兆

ひね麦の味なき空や五月雨　木節

馬士の謂次第なりさつき雨　史邦

奥州名取の郡に入て中将実方の塚ハいづくにやと尋侍れバ道より一里半ばかり左リの方笠嶋といふ処に有とをしゆふりつゞきたる五月雨いとわりなく打過るに

笠嶋やいづこ五月のぬかり道　芭蕉

大和紀行のころひとりありきして従者の旅をいとはしめて在所

すゞかまでハ料足つゝみたる紙のうらに書つけ侍る

つゞくりもはてなし坂や五月雨　去来

髪剃や一夜に金情て五月雨　凡兆

日の道や葵傾くさ月あめ　芭蕉

縫物や着もせでよごす五月雨　羽紅

七十余の老醫みまかりけるに身まかれることを...なしくまゝ一声にいるゝみの句乞けるそれを醫いまそかりし時もさらにまゐらんとされる人よあつまりてまことハ八十を夜もみゝよひゝして古来まれ

ある年みこゝろといふところかく
ゆるさかりをまも

六尺も力おとしや五月あめ　其角

百姓も麦に取つく茶摘哥　去来

しがらきや茶山しに行夫婦づれ　正秀

つみ合す舟もかけゝや麦畠　膳所　游刀

孫を愛して

麦出来の家してやらん雨蛙　智月

麦出来て鰹迄喰ふ山家かな　江戸　花紅

志ら川の関こえて

風流のはしめや奥の田植うた　芭蕉

出羽の最上を過て

眉掃を俤にして紅粉の花　同

法隆寺開帳
南無佛の太子を拝す

御袴のはづれなつかし紅粉の花　千那

田の畔の豆つたひ行螢かな　伊賀　万乎

膳所曲水之樓にて

螢火や吹とばされて鳰のやみ　去来

勢田乃蛍見ん二句

闇の夜や子共泣出す蛍ぶね　凡兆

ほたる見や船頭酔ておぼつかな　芭蕉

三熊野へ詣けるとき

蛍火やこゝおそろしき八鬼尾谷　長崎 田上尼

あれらよ鵜とひかりあふぬしまゆ　尚白

草むしや百合ハ中〳〵花の㒵　半残

病後

起上りやかしらふらつく百合の花　大坂 何処

すゞ風や畝より出る百合の花　乙州

孀蚊帳を作りて

子やなかん其子の母も蚊の喰ん　嵐蘭

餞別

蚤さすや蚊屋もいらぬ旅の宿　膳所 里東

うらく〳〵人よつれ〳〵
条室する浮肴まされもけて

みしか夜を吉次か冠者に名残哉　其角

憐ゆや蚤の出て行耳の穴　丈艸

下闇や地虫なからの蝉の声　嵐雪

容ふりや居士衣かける蝉の殻　膳所 探志

頓て死ぬけしきは見えす蝉の声　芭蕉

哀さや盲麻刈る露の中　伊賀 槐市

渡りかけて藻の花のそく流哉　凡兆

自引の表は唱哥か合歓の花　千那

白雨や鐘きゝはつす日の夕　史邦

素堂之蓮池邊

白雨や蓮一枚の捨あたま　嵐蘭

日焼田や時々つらく鳴蛙　乙州

日の暑さ盥の底の蠛蠓(ウンカ)かな　凡兆

水無月も鼻つきあはす数寄屋哉　同

日の岡やこかれて暑き牛の舌　正秀

なへて暑し籬によれは髪の落　木節

志ねんこの藪吹く風そあつくるし　野童

夕かほによはれてつらき暑さ哉　羽紅

青草ハ湯入ならなん川さらへ　江戸 巴山

千子か身まかりけるをきゝて
みのゝ国より去来
かもとへ申つかはし
侍る

なき人の小袖も今や土用干　芭蕉

水無月や朝めしくはぬ夕すゞみ　嵐蘭

志たらくに寝れは涼しき夕へかな　宗次

すゞしさや朝草門に荷ひ込　凡兆

唇に墨つく児のすゞみかな　千那

月鉾や児の額の薄粧　曽良

夕すゞみ疝気おこしてかへりけり　去来

くしらい
洛よめく

雲のみね今のハ比叡に似たる哉　大坂 之道

猿蓑集巻之三

秋

龝風や蓮をちからに花一ツ　不知読人

此句東武よりきこゆ

えし　素堂の

がつくりとぬけ初る歯や秋の風　杉風

芭蕉葉を何になれとや秋の風　路通

人に似て猿も手を組秋のかぜ　珎碩

加賀乃全昌寺に宿す

終夜秋風きくや裏の山　曽良

芦原や鷺の寝ぬ夜を秋の風　江戸 山川

あさ露や鬱金畠の秋の風　凡兆

しら露や猪の臥芝の起あがり　去来

大比叡やしの字を引て野分の雲　野童

三葉ちりて跡はかれ木や桐の苗　凡兆

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉

合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ　同

七夕やあまりいそがばころぶべし　伊賀小年 杜若

みやこにも住まじりけり相撲取　去来

朝がほは鶴眠る間のさかりかな　伊賀 風麦

蕣やぬすこの晝愛にはなきます　膳所 及肩

露のも泣みてもよきか木槿かし　嵐蘭

手哉急くみしてるり木槿哉　秋風

言花乱ひて秋うき桂られ　千那

まとも行く瀬のある音や旅籠雨り　史邦

そよ〳〵や藪の内より御あし　旦藁

秋風やとても芒はうごくはず　三川 子尹

迷ひ子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

八瀬おはらに遊吟して柴うりの文書ける序に

まねき〳〵枴の先の薄なれし　凡兆

つくしよりかへりけるにひみといふ山にて卯七に別て

君が手もまじる成べし花薄　去来

草刈よそれが思ひか萩の露　平田 李由

元禄二年翁に供せられて
みちのくより三越路にかゝり
行脚しけるにかゝの国にて
心わづらひていせまで先
達けるとて

いづくにかたふれ臥とも萩の原　曾良

桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉

百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆

初潮に打絶る小まくるまも　亡人 落梧

堅田にて

病雁の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉　同

加賀への小松と云處多田乃
神社の宝物として実盛
が菊から草乃かぶと同しく
錦のきれ有遠き事な
からまのあたり憐におぼえて

むざんやな甲の下のきりぎりす　芭蕉

桑畠や二葉ふみ中の虫狩　尚白

ちどりや碁によまぬ鳴夜は月に　風麦

いせにまかりてかへる時

葉月や先旅に渡る人さまん　云人　千子

三ケ月に蠢のあるまぢかの　之道

粟稗と目出度なりけり月よ　半残

月見せん伏見の城乃捨郭　去来

翁を草舎に招して

松をもる松笠なんぞ落月夜　伊賀　土芳

加茂に詣して涙のかゝるを
かの上人の
なにことのやしろの神垣に
えつらてしらぬしもや

月影や拍手もるゝ膝の上　史邦

友達の六條にかミそりいたゝき
こらくまゐりたまはれよ

影ぼしたつき見えて遠き朝月夜　伊賀　卓袋

しく白紙帳やおよし〻月の鏡　乙州

京筑紫去年の月とふ僧仲間　丈艸

野分の桐よやつれよ月一つ　凡兆

なりしみてこましよからぬ月の面　尚白

向の能宿も月見る契かな　曾良

元禄二年つるかの湊に
月をみて氣比の明神に
詣遊行上人の古例を
きく

月清し遊行のもてる砂の上　芭蕉

仲秋の望猶子を送葬して

うるゝ夜の月も見んよなら程遠　去来

明月やところは寺の茶の木はら　膳所　昌房

月見する人の避てとほりけり　羽紅

僧正のいもとの小屋のきぬた哉　尚白

初潮や鳴門の浪の飛脚舟　凡兆

一戸や衣もやぶるこまむかへ　去来

稗の穂の馬逃したる気色哉　越人

渋糟やからすも喰はず荒畠　正秀

あやまりてぎゞうおさゆる鱸哉　嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子哉　凡兆

むつかしき拍子も見えず里神楽　曾良

旅枕鹿のつき合軒の下　江戸 千里

鳩ふくや渋柿原の蕎麦畠　珍碩

上行と下くる雲や秋の天　凡兆

鶺鴒の尾もとまるらし鐘つり　半残

ねぶの間のよすみ迄高く蜀黍　尚白

菜を切る跡まつくまなすの秋　其角

高土手に鶸の鳴日や雲ちぎれ　珎碩

こゑのみや[illegible]稲葉の秋　土芳

稲かつく母に出迎ふうなひかな　凡兆

自題落柿舎

柿ぬしや梢はちかきあらし山　去来

志ら露やゆくゝ橋の下なる[illegible]　加賀小松 塵生

肌さむし竹切山のうす紅葉　凡兆

神田祭

[illegible]神田祭の鼓うつ音拍子さへあつきかりけり　蛩足

花すゝき大名衆をまつり哉　嵐雪

ひ秋の空五日弱るすゝき哉　丈艸

立出る秋の夕や風ほろし　凡兆

世の中ハ鶺鴒の尾のひまもなし　同

塩魚の歯にはさかふや秋の暮　荷兮

猿蓑集巻之四

春

梅咲て人の怒の悔もあり　露沾

上臈の山荘にまかりけるに
候しまかりて

梅か香や山路猟入ル犬のまね　去来

しらうめの香や分入里ハ牛の角　加賀　句空

庭興

梅か香や砂利しき流す谷の奥　土芳

もつ據屋背中よりみゆる梅の花　半残

梅か香や酒のかよひのあたらしき　膳所　蟬鼡

むめの木や此一筋を蕗のたう　其角

子良館の後に梅有と聞て

御子良子の一もと床し梅の花　芭蕉

痩藪や作りたてたる軒の梅　千那

灰捨て白梅うるむ垣ねかな　凡兆

日当りの梅咲ころや屑牛房　膳所　支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅になり込ひゞきかな　風麦

武江におもむく旅亭の餞別

寝所しき窓の細目や闇の梅　乙州

幸来のしし孫生のくらしめ
つゝしもいて日にまさて梅
のさかりひまにわかれは四度
庵室のうちなむめの花や匂ひを
窓のとのかく日ころのまこと
まれやにいさいへまてもなよ
かなしく感動のかよう人の深
なまくのなれ行の事

又あしくまかりて眠りけるに
あとに人のすゝむる風経を忘きらや

夢さけて又一句ひ雪ほん梅　嵐蘭

百八のかねて迷ひや闇のむめ　其角

ひとり寝も能宿とらん初子日　去来

野畠や雁追のけて摘若菜　史邦

くつ声や雪ふ満する若菜粥　嵐蘭

雪の明月飛より引わたとゆき　如行

憶翁之客中

裾折て菜をつみしん草庵　嵐雪

つみすてゝ蹈付がたき若菜哉　路通

七種や跡にうかるゝ朝からす　其角

鍬すかし鶉のかけし根芹哉　丈艸

うすらひやわづかに咲る芹の花　其角

朧ハ雪ありき江月夜かな　同

鉢たゝきこぬよとなれば朧なり　去来

鶯の声を踏落す垣穂つれ　伊賀　一桐

鶯やさし屋一声のまちかな　江戸 溪石
うくひすや遠路なから礼かへし　其角
鶯や下駄の歯につく小田の土　凡兆
鶯や窓に灸をすへなから　伊賀 魚日
やねものゝ垣根とらぬはすまゐかな　探丸
け桜はちるの持へき柳かれ　江戸 卜宅
堀こしにらしてくれて柳かな　同 遠水
もとゝふ 梅変れよ柳かし　尚白

青柳のしたるゝや鯉の住所　伊賀 一啖
雪汁や蛤いかす場のすみ　同 木白
待中の正月もはやくたり月　揚水
田家にありて
麦めしにやつるゝ恋か猫の妻　芭蕉
うらやましおもひ切時猫の恋　越人
うき友にかまれて猫の空ながめ　去来
露沾公にて餘寒の當座

春風にぬぎもさだめぬ羽織哉　亀翁

梅の花ちりし後を三日月　尚白

出かはりや櫃にあまれることのをけ　亀翁

出替や幼ごゝろに物あはれ　嵐雪

骨柴のかられながらも木の芽かな　凡兆

白魚や海苔ハ下部のかい合せ　其角

人の手にとられて後や桜海苔　尾張　杉峯

春雨にたゝき出しけりつくし　元志

陽炎や取つきかぬる雪の上　荷兮

かげろふや土もこなれぬ別れ霜　百歳

かげろふやほろほろ落る岸の砂　土芳

いとゆふのいとあそぶなり虚木立　伊賀　氷固

野馬に子共あそばす狐哉　凡兆

かげろふや柴胡の糸の薄曇　芭蕉

いとゆふに貌引のばせ作り独活　伊賀　配力

狗脊の塵にえらるゝわらび哉　嵐雪

彼岸まへさむさも一夜二夜哉　路通

ミのしりや常の顔にて涅槃像　野水

蔵並ぶ裏ハ燕乃かよひ道　凡兆

立さはく今や紀の人いせの房　伊賀 沢雉

春雨や庭の小草に花咲ぬ　嵐虎

高山を外て

春雨や山より出る雲の門　猿雖

不性さやかき起されし春の雨　芭蕉

春雨や下田蓑のしまれ雛賣　史邦

はるさめのあかるや軒になく雀　羽紅

泥亀や苗代水の畦つたひ　史邦

蜂ごもる木葎の緑や虫の嚢　昌房

振舞や下座になをる去年の雛　去来

春風にこかすな雛の駕籠の衆　伊賀 荻子

桃柳くばりありくや女の子　羽紅

すくせ茶焼えんじのしめらしき顔　三川 鳥巣

里人の臍落したる田螺かな　嵐推

蛛のまく一こ絶宿よりも慈悲のほど　半残

紙鳶切て白根が嶽を行方かな　加州山中 桃妖

いつのほにかゝるもすゞしや漆　伊賀 園風

月の影やこゝく竹の子の親すゞめ　珎碩

萩鼓ぬるむ春のすゞめや縁のさき　土芳

窗の絶や巣なきうしてかく衛　芭蕉

越より飛騨へ行とて籠の
わたりのあやうきところ〳〵道す

鷺の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　凡兆

みすゞらんとする雲のはしらかな　伊賀 石口

子や待ん餘り寒さの綿のあるまゝ　杉風

あき山家にて
をさなきみて

ひらひらと中の拍子や雛の袖　芭蕉

芭蕉庵のふるきを訪

菫草小鍋洗しあとやこれ　曲水

末乱筋張して見るゝ狸穴かな　江戸 山店

畫讃

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　芭蕉

白玉の露よきふつく椿かな　車来

ゆきミしらしくやまぶきひうら
おわされバ髪けづりつくんもお
もうしとはまき
すまむかへてく

笄も櫛も昔やちり椿　羽紅

津國山本
蝸牛おりよ見るつきき哉　坂上氏

うぐひすの笠おとしたる椿哉　芭蕉

あさくまで追てよきけばかり　伊賀 利雪

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山ざくら　其角

一枝はおらぬもわろし山ざくら　尚白

鶏の声もきこゆるやま桜　凡兆

真先に見し枝ならんちる桜　丈艸

有明のころてよ咲く遅ざくら　史邦

花森にまとうまでふるはなの雪　千那

葛城のふもとを過る

猶みたし花に明行神の顔　芭蕉

いがの国花垣の庄ハそのかみ南良の八重桜の料に附られけると云伝えはんべれば

一里ハみな花守の子孫かや　同

亡父の墓東武谷中にありけるに三歳にして別れ其年の暮の跡よりしらぬ墓のおく桜植置行るよし折ふし母がゆかりこひのつたへてうれ桜を二木植かへるを此の墓植そへて咲されるまでも

まふしや花吹よ野の往還り　園風

知人にあはしあはしと花見かな　去来

ある僧の嫌ひし花の都かな　凡兆

浪人のやどにて

嵐たつ暮の夜あれも花輟　半残

腰きゝしれ花すみ山八郎　伊賀 長眉

これも奥なるや

よしの源くはしく

大峯やよしのの奥の花の果　曾良

道灌山にのぼる

石灘やあらそひの代を出ぬ紅 源氏の猪かたんこ 嵐蘭

押手に寝ちるあれ立するゝ 羽紅

庚午の歳家を焼て

焼にけりされども花はちりすまし 加賀 北枝

はなちるや伽藍の樞おとしけり 江戸 凡龍

海棠のくらし身を満から庭の月 普船

大和行脚のとき

草臥て宿かる比や藤の花 芭蕉

山鳥や躑躅よけ行尾のひねり 探丸

やまつゝじ海に見よとや夕日影 智月

兎角して卯花つぼむ弥生哉 山川

鶯のおしすゝめてよるも啼かれ 伊賀 式之

木曽塚

真先の石しそたの流木曽桜 乙州

春の夜はたれか初瀬の堂籠　曾良

望湖水惜春

行春を近江の人とおしみける　芭蕉